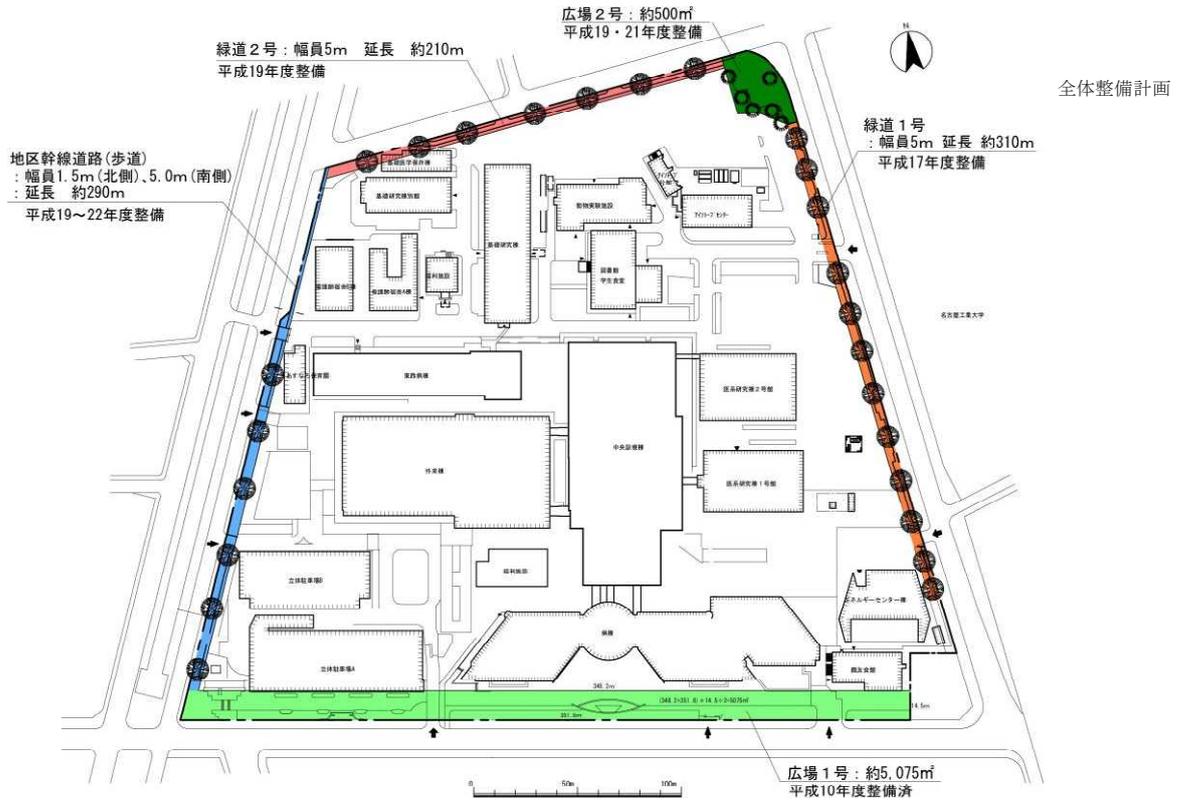


# 大学，自治体，地域住民が協調し策定された 地区計画に基づき潤いある歩行者空間を整備

## 名古屋大学 鶴舞キャンパス緑道等



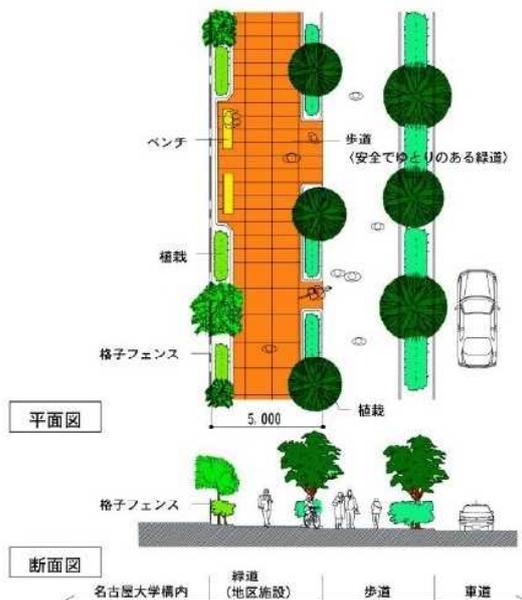
### ◆◆◆整備の目的・方向性◆◆◆

- 病院再開発を確実に進めるため，自治体，地域住民と協議の上，地区計画を策定
- 地区計画に基づき，地域の利用に配慮した安全で快適かつ緑豊かな潤いある歩行者空間を確保

### ■計画設計のポイント

#### 既存歩道と一体の歩行者空間の形成

緑道1号整備  
イメージ



緑道1号 (整備後)



緑道1号 (整備前)



名古屋市において定められた地区計画に基づき、鶴舞キャンパスの再整備に併せて、緑道1号約310m、緑道2号約210m、広場2号約500㎡、地区幹線道路（歩道）約290mの整備を段階的に行った。

緑道2号整備  
イメージ



緑道2号（整備後）



緑道2号（整備前）



既存の塀等を取り除き、敷地境界線より5mセットバックした部分を緑道として整備し、既存歩道（名古屋市）と一体的な歩行者空間の形成を図った。また、歩行者空間を快適でうおいのあるものとするために、既存樹木の保存に配慮しつつ、緑化を図った。

## ■ 整備戦略

### 都市計画法に基づく地区計画を策定

鶴舞キャンパスの附属病院においては、平成5年度文部省連絡調整会議において事業開始が了承され、附属病院の再開発が着手されたが、当キャンパスの法定容積率200%を超過することが予想されたため、H14年より名古屋市と容積率緩和に向けた協議を開始した。

H14年10月、サッポロビール跡地（千種区）と名古屋大学鶴舞キャンパスを併せた地域（名古屋千種・鶴舞地域）が、名古屋市の都心部に隣接し大学や文化施設が集中するという立地特性を生かし、大規模工場跡地や



広場2号

大学キャンパスの再整備による新しい複合都市拠点的形成することを目標として、都市再生特別措置法に基づいた「都市再生緊急整備地域」に指定された。その後、容積率の緩和等を定めた鶴舞町地区計画を策定し、平成16年8月に都市計画決定され、キャンパス周囲に緑道・広場等の地区施設を整備することにより、段階的に上限235%まで緩和を受けられることとなった。

なお、緑道1号においては、国土交通省の補助金（平成17年度都市再生プロジェクト及景観形成施設整備推進費）を活用して整備が行われている。

## ■ キャンパスマスタープラン

平成18年3月に策定された「キャンパスマスタープラン2005」の基本目標の一つとして「個性的で開かれたキャンパス」を創出し、学内外との有機的な連携を図ることを挙げている。また、鶴舞キャンパスの周囲は、「地域交流ゾーン」「保存緑地」「歩行者優先の屋外交流環境の整備」として位置付けられており、当整備においても既存の塀等を取り除いて、緑と一体の歩道、広場の整備を実施しており、市民に開かれたキャンパスの創出が行われている。

## ■ 利用の促進

### 維持管理の軽減

緑地帯は維持管理の軽減を考慮し、自動散水設備を設けるとともに、樹木を常緑樹（クスノキ）とし、下草は雑草等を抑制するマルチングチップ材（再生材）を敷設した。また、歩道部分は透水性の脱色アスファルト舗装材及び透水性平板ブロック材（再生材）を使用し、環境にも配慮した計画としている。

また、利用者の憩いの場となるようベンチ等を設置するとともに、植栽等の維持管理を十分に行い、良好な環境の維持に努めている。

## ■ 施設整備の効果

### 緑のネットワーク

附属病院を有している鶴舞キャンパスは四方を道路に囲まれており、車や人の往来も多い。

キャンパス西側のJR中央線沿いは、病院再開発により、車や人の往来が更に増えるため、安全で快適かつ緑豊かなうおいのある歩行者空間とした。

また、キャンパス東側と北側については、既存樹木の保存活用を図るとともに地域の利用者に配慮して、鶴舞公園等との連続した緑のネットワークの形成に資する緑道を配置し、さらに、キャンパス北東角には、緑のネットワークを効果的に連結する広場を配置した。

これらの整備により、舞鶴キャンパスは、利用しやすく、潤いのあるキャンパスとなった。

## ■ 補足

整備年度：平成17年度～平成22年度

# 広場を中心に建物を計画し 知的な出会いの場を形成

東京大学 伊藤国際学術研究センター



外観（本郷通りより桜広場を見る）

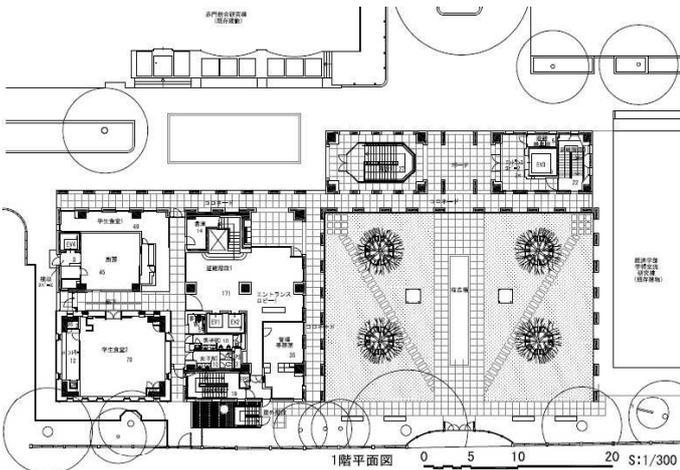
外観（ゲイトビル）

桜広場

## ◆◆◆整備の目的・方向性◆◆◆

- 社会と大学との関わりを深めるための社会連携及び国際交流拠点を整備する
- グローバルな視点をもったリーダー育成、学究のための国際会議、各種学会のための施設

## ■計画設計のポイント



## 広場を中心に計画

本施設は本郷通りから東京大学に向かう人に対して、キャンパスが最初に姿を現す場所にある。緑化された「桜広場」を中心にメインビル、ゲイトビルを配し、建物の下全体が地下階となっている。この場所を再び建物によって食いつぶすのではなく、広場を中心に計画することでキャンパスの貴重な緑地を回復し、街に向かって開かれた知的な出会いの場が生まれる。

### だ円形の講堂

桜広場の地下には、国際的な会議や学会に対応する約500人収容の講堂を整備している。講堂は、平面形、断面形ともに空間を柔らかく包み込む形で、話者と聴者の一体感が生まれる講堂となっている。



地下2階講堂（伊藤謝恩ホール）

### 既存建物との調和に配慮

本施設はメインビルとゲイトビルの二つの建物から構成されている。メインビルの外観は、1～4階までは美しく経年変化するレンガ積みとし、本郷通り沿いのレンガ塀や赤門倉庫（既存建物で最古の築後約100年）との調和に配慮するとともに、5階を金属板による屋根階として表現している。外観を分節す

ることで、キャンパスの基調となる内田ゴシック様式のスケールに合う計画としている。

メインビルに隣接するレンガ造りの建物（赤門倉庫）は、大正初期に建てられた倉庫であり、これまで日常的に利用されることはなかった。今回の計画でリニューアルを行い、各階で行き来のできるブリッジを設け新しい建物と一体感をもたせた。また、旧外壁は新しい内壁となり、活気ある空間として再生させた。

## ■整備戦略

### 寄附による整備

本施設の建設に当たっては、伊藤雅俊氏（セブン&アイ・ホールディングス名誉会長）並びに伊藤伸子氏（同夫人）による東京大学への寄附により実現され、学内関係者が一体となる体制を整備し取り組んだプロジェクトである。

## ■利用の促進

### 最先端のスペースとサービスを提供

社会連携・国際交流の拠点となるべく、世界水準の設備とサービスを目指し、地下2階には講堂（伊藤謝恩ホール）と多目的スペース、地下1階にはギャラリー、2階・3階には各種の集会用教室・会議室が設置されている。さらに、1階には（フォーマル）レストランと（カフェ）レストラン、2階にはファカルティクラブがある。

## ■施設整備の効果

### 高い利用率

地下2階にある伊藤謝恩ホールは、学内で中規模な講堂であり、また併設される多目的スペースやホワイエでレセプションも行えるため、開設当初より利用率が非常に高い。また本施設と本郷通りに囲まれた屋外スペースである桜広場にはベンチが設置されており、人々の憩いの場となっている。

## ■補足

整備年度：平成21年度～平成23年度（基本設計を含む）  
BCS賞（2013年）受賞

# サテライト・キャンパスで、まちの活性化に寄与し、高専のプレゼンスを示す

小山工業高等専門学校 小山高専サテライト・キャンパス



## ◆◆◆整備の目的・方向性◆◆◆

○隣接市にサテライト・キャンパスを設置し、教育・研究の発展的展開、情報発信、地域貢献で、まちの活性化に寄与し、小山高専のプレゼンスを示し、入学志願者増にもつなげる

### ■計画設計のポイント

#### とちぎ歴史文化まちづくりセンター

小山高専は、平成22、23年度に高専改革推進経費の支援を受け、平成23年8月に登録文化財である栃木県栃木市の「北蔵」を改修・整備して「小山高専サテライト・キャンパス とちぎ歴史文化まちづくりセンター」を設置した。



ここでは、下記のような各種事業を展開している。

#### ○講座・フォーラム

幼稚園児から小中学生や、高校・大学・一般の方を対象とし、人文系講座、ものづくり・工作・パソコン・実験系講座、フォーラムなどを実施。また美術館と連携講座を開催。



#### ○地域研究

JST等の支援を受け、栃木市の歴史的町並みの維持保全・総合防災計画策定を目的とした調査・研究を栃木市及び地域住民等とともに実施し、持続可能な地域社会の構築のために貢献。



#### ○伝統技術・建具金物開発

地元の大工職人、本校ものづくりセンター、関東職業能力開発大学校等が連携し、伝統技術・技能と現代技術を組み合わせ、建具金物等を開発し、歴史的建物の整備に活用。



#### ○デザイン開発

学内で使った製図板の再利用や伝統工芸品を活用したテーブル、蔵に合う椅子、金属のレーザー加工による看板製作等、デザインの創造的開発と教育を実施。

おいて市が所有する歴史的建物の活用案の募集（「倭町小江戸ひろば北蔵」の活用プロポーザル）を、かねてより検討してきたサテライト・キャンパス設置の機会ととらえ、民間事業者（店舗）と共同で応募したところ、その情報発信力や先進性、総合性が評価されて最高点を獲得し活用者として採択された。サテライト・キャンパスとしての改修整備は小山高専教員が中心となって設計し、栃木市が工事し、小山高専が民間事業者とともに市から賃借。

### ■利用の促進

#### ロゴデザイン コンペティション

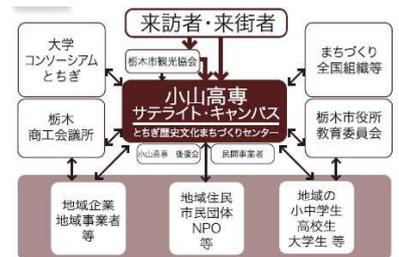
一般公募によるロゴデザインコンペティションを実施し、東京の専門学校に通うモンゴル人留学生の作品を採用した。



### ■施設整備の効果

#### 中心市街地活性化・文化振興に寄与

このサテライト・キャンパスは、全教職員の総合力を集結するとともに、自治体や商工会議所、まちづくり団体等の地域の



各機関と連携・協力して利用を促し、様々な共同事業・共同研究を隣接市の中心部の歴史的建造物とその周辺ひろばにおいて展開するもので、他高専にはない独創性と新規性を持っている。また、当該地域の中心市街地活性化を担う中心施設の一つとして期待されており、関連機関からの事業支援があるなど、継続性、将来性は高く、その地域文化振興への貢献により小山高専校長が栃木市文化大使を委嘱された（H25年度）

#### 入学志願者の増

少子化による15歳人口の減少が進む中、サテライトキャンパスの設置後、約8%の入学志願者増が認められた。

設置前の入学志願者：309名（H22年度）

設置後の入学志願者：334名（H23～H25年度の平均）

### ■整備戦略

#### 歴史的建物の活用のプロポーザル競技

小山高専は、平成21年秋に栃木市が公募した、中心市街地に

### ■補足

平成22年 2月 プロポーザル採択決定

平成22年10月 小山高専サテライトキャンパス発足

# 駅前広場と一体で 社会に開かれた場を創造

東京工業大学 蔵前会館(TOKYO TECH FRONT)



大岡山駅前広場より

地域に開かれたプラザ

緑が丘へ続く軸線

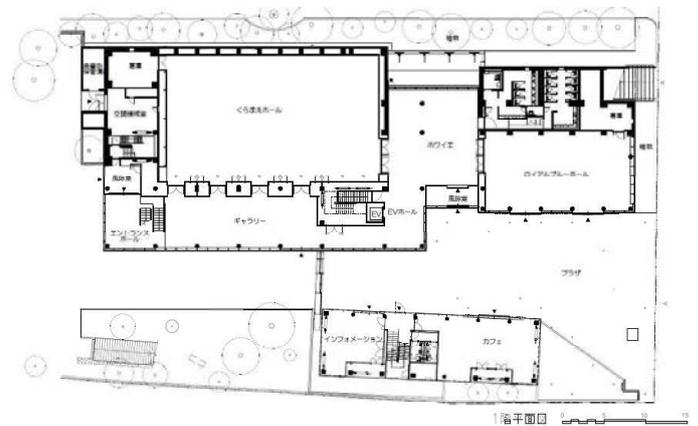
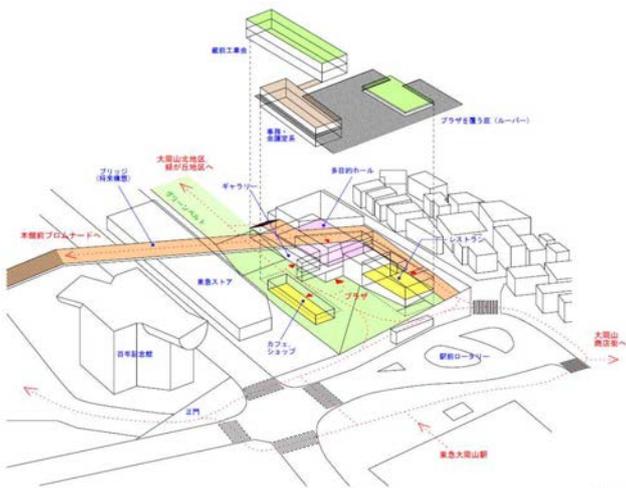
本館へ続く軸線（ブリッジ未整備）

## ◆◆◆整備の目的・方向性◆◆◆

○大学の顔をつくり，地域に開かれた大学とする

### ■計画設計のポイント

TTFを中心とした動線の流れ



### 地域に開かれた大学

TTF (TOKYO TECH FRONT) は、東京工業大学のメインサイトである大岡山キャンパスにおいて、大岡山駅前の正面脇に建つ百年記念館とともに大学の「顔」となる建物として、駅前広場整備と一体的な整備が行われた。大岡山駅前広場からの人の流れを構内へ迎え入れ、地域に開かれた大学のイメージを形成している。



百年記念館

### 「プラザ」「ゲート」「コネクション」

本建物には「プラザ」「ゲート」「コネクション」という3つの性格をもたせた。  
 ○隣接する住宅地へ配慮し、独立した様々な活動に対応させたコンパクトな建物ボリュームを敷地内に分散させることで、建物に囲まれながらも地域に開かれた「プラザ」を形成させた。  
 ○分散させたボリュームを統合する庇（ひさし）による水平線の構えにより、駅前広場からの人の流れを構内へ迎え入れる新たな「ゲート」として位置付け、開放的な建物構成と相まって、地域・社会に開かれた大学のイメージを形成させた。  
 ○「本館へブリッジから続く軸線」と「緑が丘への軸線」という学内の二つの動線を含みつつ、駅前の流れや商店街を初めとする地域に連続する動線が集中し交錯する「コネクション」空間とした。

### ■整備戦略 計画的整備

キャンパス再整備計画全体を俯瞰（ふかん）する目的で2004年に学長を中心とした企画室施設整備専門班を設置。

2005年に主要3キャンパスの将来計画策定グループを設置し、2006年に大岡山キャンパスとすずかけ台キャンパスにおける「キャンパス将来計画」を策定した。

キャンパス将来計画の中で、大岡山駅前広場空間と密接に関連した多層的機能空間として整備することが明記されている。

### ■利用の促進 同窓会との共同事業

この施設は、東京工業大学とその同窓会組織である社団法人蔵前工業会との共同事業により、社会との交流の場として建設され、2009年3月にしゅん工している。



会館に設置された  
モニュメント「飛翔」

### ■施設整備の効果 地域の憩いの場

年間を通じて、学内行事を始め学会等の会合やイベントに使用され、学内外の交流の場となっている。また、駅前広場からの入り口付近に併設されたカフェやレストランを利用する来訪者も多く、地域の憩いの場となっている。

### ■補足

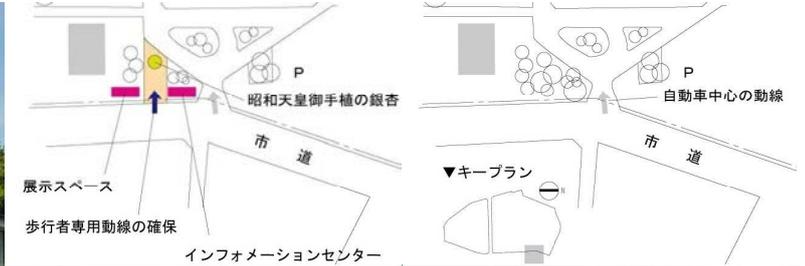
整備年度：平成19年度～平成20年度

# 閉鎖的な正門を 地域に開かれた正門へ再整備

## 鹿児島大学 正門周辺整備



アプローチからインフォメーションセンターを見る



整備後

整備前

### ◆◆◆整備の目的・方向性◆◆◆

- 大学開放, 地域に向けた大学の顔づくり
- 地域社会に向けた情報発信・地域社会との交流を促進する

### ■計画設計のポイント

#### 足を踏み入れやすい導入空間

インフォメーションセンターと展示スペースを左右に配置し、学外者に対しても足を踏み入れやすい導入空間の創出を計画した。



アプローチより新正門を見る

インフォメーションセンター

#### 安全・安心な導入空間

車両、歩行者等の各動線の明確化、入構者の管理に適した守衛所の配置等により、安全・安心な導入空間を創出した。

#### 既存資源を観光要素として活用

昭和天皇御手植の銀杏（いちよう）等、既存の資源を景観要素として活用し、記念性のある親しみやすい開放的な導入空間を創出した。



上空より新正門を見る



中央高木が昭和天皇御手植の銀杏

### ■整備戦略

#### 教員・学生の参加

鹿児島大学工学部建築学科の教員・学生をメンバーとしたワーキンググループを立ち上げ

て、検討を行った。

郡元フレームワークプラン2009では、地域交流ゾーンとして位置づけ、地域に開かれたキャンパスの創出を図っている。

### ■利用の促進

#### オリジナルグッズ等の販売

大学のイメージ向上等のため、インフォメーションセンターでは、大学オリジナルグッズ、附属農場生産物、教育学部附属特別支援学校生徒作品等の販売・展示などを行っている。

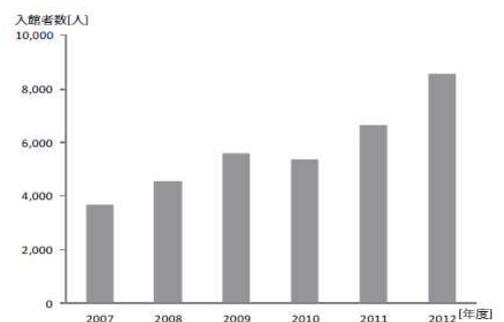


鹿児島大学ブランドの焼酎

### ■施設整備の効果

#### 入館者数の増加

インフォメーションセンターは、鹿児島大学を訪れる市民や企業等の方々のコミュニティスペースや、大学の情報発信、案内施設として、幅広く利用されており、入館者数も急激に増加している。



インフォメーションセンター入館者数推移

### ■補足

整備年度：平成18年度